

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 1 日現在

機関番号：12613

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010～2012

課題番号：22720100

研究課題名（和文）「国民小説」とオリент表象—19世紀イギリス・アイルランド文学史再考

研究課題名（英文）National Tales and the Representations of the Orient: Revising the History of 19<sup>th</sup>-Century British and Irish Literature

研究代表者

吉野 由利（YOSHINO YURI）

一橋大学・大学院法学研究科・准教授

研究者番号：70377050

研究成果の概要（和文）：

本研究は、「国民小説」においてイングランドの文化的他者として構築されるアイルランド像とオリент像の交錯を検証した。特に、人物造形および語りの戦略における“auto-exoticism”の例に注目しながら、“auto-exoticism”は、「国民小説」のサブジャンルを確立した Edgeworth や Owenson らがアングロ＝アイリッシュ系女性作家としてのアイデンティティと、連合王国の中での自分たちの文化的な立場を正当化することを可能にしていることを指摘した。また、リアリズムを模範とする 19 世紀イギリス・アイルランド小説史観の見直しも試みた。

研究成果の概要（英文）：

This research explores the representations of the Irish and the Orient in “national tales”, as the cultural other to the English nation. In particular, “auto-exoticism” in terms of characterization and narrative strategies is examined. It is argued that the examples of “auto-exoticism” enable Edgeworth and Owenson, who founded national tales, to vindicate their identity as Anglo-Irish women writers and their cultural location within the United Kingdom. This research also attempts to revise the history of nineteenth-century British and Irish novel, which has put emphasis on realism.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
2012年度	600,000	180,000	780,000
総計	2,500,000	750,000	3,250,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学 英米・英語圏文学

キーワード：イギリス文学、アイルランド文学、国民小説、オリент、文学史、ポストコロニアル批評

## 1. 研究開始当初の背景

「国民小説」は、19世紀初頭のイギリス・アイルランドの「合同」を背景にアングロ＝アイリッシュ系作家によって確立された。イングランド文化を標準としながらも文化的に柔軟な連合王国のあり方を模索すること

から小説の文学性を高めた重要なサブジャンルとされる。近年、このサブジャンルにおけるアイルランド表象とオリент表象の関係が、国内外のイギリス・アイルランド文学研究において注目されてきた。最近では、Miranda Burgess が *The Cambridge Companion*

to the Irish Novel (2006)で、「国民小説」の起源に関連したサブジャンルとして「オリエンタル物語(oriental tale)」を挙げている。しかしながら、発展途上の分野で先行研究の層は薄い。

例えば、ポストコロニアル批評理論を援用し、アイルランド文学に「オリエンタリズム」を認める Joseph Lennon の *Irish Orientalism* (2004)は、Sydney Owenson (1776-1859)の「国民小説」の一部を取り上げるに留まっている。Julia M. Wright の *Ireland, India and Nationalism in Nineteenth-Century Literature* (2007)は、「国民小説」を確立・展開した Maria Edgeworth (1767-1849)や Charles Maturin (1780-1824)の作品を Owenson の作品と共に論じるが、主な対象をインドを舞台とした作品に絞り、中東の表象に関する議論は省いている。中東の表象は18世紀の『アラビアン・ナイト』の翻訳と転用の流行にみられるように英語圏のオリエンタル表象の根本であるため、この省略は妥当性を欠くと思われる。

イギリス文学研究の潮流では、Ros Ballaster の *Fabulous Orientals* (2005)が、それまで軽視されてきた「オリエンタル物語」のサブジャンル再評価を行い、研究者の関心を集めた。しかし、対象を1785年までとし、「国民小説」との間に密接な関係を認めるには至っていない。また、イギリス・ロマン派期研究においては Nigel Leask らの貢献により、「ロマン主義オリエンタリズム」が一大研究分野となっているが、主要な対象はロマン派男性詩人の作品に限定されがちである。

上記先行研究の問題点を踏まえ、「国民小説」を体系的にとらえた視座より、そこに展開される中東とインドの表象の双方を対象とする包括的な研究が待たれている。

## 2. 研究の目的

「国民小説 (national tale)」の主要作品では、イングランドの文化的他者として構築されるアイルランド像とオリエンタル像がしばしば交錯する。本研究では、その交錯の検証を通じて、イングランド文化にとっての他者性を重層的に解明し、イギリス、アイルランドの国民性の(再)定義について理解を深めることを目的とする。同時に、19世紀イギリス・アイルランド小説史観の見直しも試みる。

## 3. 研究の方法

19世紀初頭前後のイギリス・フランス・アイルランドのオリエンタリスト言説を概観し、「国民小説」におけるオリエンタリスト言説の転用を検証する。その転用が示唆する

ネーション、ジェンダー、階級等に関わるイデオロギーの分析を行う。さらに、Susan Lanser の物語理論を応用し、「国民小説」における語りの権威の構築を考察する。具体的には、「一人称」・「三人称」の語り手や架空の「編集者」が、イングランドとアイルランドの伝統文化のそれぞれにどのような距離を持つ存在として描かれているか、彼らの語りのパフォーマンスや言語的特徴を分析する。この手続きにより、プロットの示唆するイデオロギーに、語りのモードが矛盾していないか等、多角的な作品読解が初めて可能になる。Edgeworth と Owenson の「国民小説」では様々な語りのモードが試されており、作品における文化アイデンティティの模索と連動しているため、このような総合・有機的方法論は不可欠である。

## 4. 研究成果

### (1) アイルランド研究へのポストコロニアル理論の援用

アイルランドを「植民地」のカテゴリーに入れること、アイルランド研究にポストコロニアル理論を援用することの妥当性は、専門家の間でも議論が継続している。従って、本研究の第一段階として、ポストコロニアル批評を取り巻く論争の概観、特に、アイルランド文学研究における応用の問題点の整理を重点的に行った。さらには、18世紀から19世紀にかけてイギリス・アイルランドで生成されたオリエンタリスト主要テキストの検証を行った。20世紀のポストコロニアル理論に先立つ当時の帝国主義言説を直接確認するという意味で、重要な手続きであった。特に、Charles Vallancey の手稿の調査は、国民小説がジャンルとして確立する歴史コンテキスト、精神的土壌の理解を深める手がかりとして非常に有意義であった。

この検証を踏まえ、Edgeworth や Owenson の「国民小説」におけるオリエンタリスト思想への応答、特に、Joep Leerssen が指摘したアイルランド文学特有の“auto-exoticism (自己異国人化)”の例を考察し、「国民小説」へポストコロニアル理論を応用することの不適切さを確認した。

### (2) アングロ=アイリッシュ系文学とヨーロッパ文学

アイルランドにおけるオリエンタリスト思想に関連した論争を、イギリスの植民地としてのアイルランドという狭い文脈に限定することなく、ヨーロッパ他国のオリエンタリスト思想との関連も視野に収めたより広

い文脈において分析することで理解を深めた。また、「国民小説」の個別テキストを、ロンドンの文壇、大英帝国の「ケルト辺境」としてのアイランド、英語圏へオリエンタリスト言説を輸出したフランス、アイランド人のルーツのひとつとしてみなされる地中海世界、中東、南アジアを結び交錯する文化・政治言説のネットワークの中に捉えることによって、そのネットワークに内在する大英帝国の支配理念（イングランド文化を標準としながら、文化的に柔軟な支配階級を創出するシステムの理念）の一端を検証した。

この検証は、従来イギリス文学の派生系として捉えられる傾向にあったアングロ＝アイリッシュ系文学を、より大きなヨーロッパ文学の伝統と関連づけようとする最近のアイランド批評の潮流に連なる意義をもつ。

### （3）「国民小説」のオリエンタリスト言説への応答

「国民小説」に編み込まれるオリエンタリスト言説と「自己異国人化」の語りの拮抗が、EdgeworthやOwensonの「ケルト辺境」の女性作家としての語りの権威の構築と重要なかわり合いを持つことを指摘した。たとえば、Owensonの*The Wild Irish Girl*においては、ゲール系アイランド人のヒロインの「自己異国人化」が注目されてきたが、本研究は、そのようなヒロインの人物造形が、実は「文化的他者」としてロンドンの父権的文壇から疎外されかねなかったOwensonが、「自己異国人化」することで語りの権威を守ろうとした戦略と連動していることをした。上記のアプローチは、「国民小説」におけるオリエンタリスト言説への応答を、ジェンダーの問題系へ接続すること、また、アングロ・アイリッシュ系女性作家の文化アイデンティティの複雑な構築、さらには、イギリスとアイランドのナショナル・アイデンティティの複雑な構築を示すことで、先行研究を補う意義を持つ。

### （4）19世紀文学史の修正

イギリス・アイランドの小説史観（特に顕著にあらわれるのは小説起源論）の傾向は西欧のプロテスタント的価値と結びついたリアリズムを19世紀小説評価の規範とするところにあり、それは相対化されねばならないと、Joe Cleary (2005)とMargaret Kelleher (2005)は指摘している。本研究の成果は、EdgeworthやOwensonのケース研究から、そのような文学史の相対化は、ClearyとKelleherが想定した時代以前に遡る必要があることを示したことにある。

また、たとえばEdgeworthの作品に混在するリアリズムとロマンスの混在は、ロマン派期イギリス小説の欠陥とみなされてきたが、近年再評価する動きが出て来ている。グレート・ブリテンとアイランドの「合同」という政治的現実を表象するモードとして、以下にリアリズムとロマンスの混在が機能しているか、体系的なジャンル論の見直しが必要であり、基盤研究(C)「国民小説におけるリアリズムとロマンス」(平成25～27年度)に課題を引き継ぎ、研究を発展させることにした。

### （5）「国民小説」研究、ロマン派期オリエンタリズム研究への示唆

「国民小説」を体系的に捉えることでLennonの先行研究の補完を、インドの表象と中東の表象をあわせて論じることで、Wrightの先行研究を補完した。

また、Ballasterが対象とした時代以降のイギリス・アイランド文学史上における「オリエント物語」の意義を明らかにし、男性詩人の作品を主要対象とするロマン派期オリエンタリズム研究の不均衡を是正した。

19世紀イギリス小説研究への関連としては、4.(4)で述べたように、ロマン派期イギリスにおけるロマンスとリアリズムの再評価の潮流に、本研究の成果を関連づけることが建設的であり、「国民小説」が同時代のイギリス小説とどのような影響関係にあったか、今後の研究で検証する予定である。

以上の研究内容に関し、国内では入手・閲覧が困難な資料の調査を次の図書館で実施した：大英図書館・ロンドン大学附属図書館、アイランド国立図書館、ロイヤル・アイリッシュ・アカデミー図書館、ダブリン大学図書館、フランス国立図書館、グレース王妃記念アイランド図書館。

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ① 吉野由利、「ロマン派期の文学とセクシュアリティ」、イギリス女性史研究会ニューズレター、査読無(依頼原稿)、第10号、2013(6月刊行予定)、2
- ② 吉野由利、「Thomas Beddoesの家庭の医学」、日本ジョンソン協会年報、査読無(依

頼原稿)、第 37 号、2013、20-24

〔学会発表〕(計 3 件)

- ① 吉野由利、「海外学会報告 IASIL 年次大会」、ジェイン・オースティン研究会(関東)例会、招待講演、2011 年 12 月 17 日、青山学院大学
- ② Yuri Yoshino, “Madwomen in the Laundry”, International Association for Irish Literary Studies Conference, 2011 年 7 月 19 日、ベルギー・カトリックルーヴァン大学
- ③ Yuri Yoshino, “How to Define National Literature When Traditional Language Becomes Extinct”, Global Studies Conference, 2010 年 6 月 23 日、韓国・釜山大学

〔図書〕(計 4 件)

- ① 日本ジョンソン協会、開拓社、『18 世紀文学研究第 5 巻』、2014、査読有、吉野由利、20-24
- ② 海老根宏監修、松柏社、『19 世紀英国小説』、2013 年 9 月刊行予定、吉野由利、掲載頁数未定
- ③ 三浦玲一・早坂静編、彩流社、『ジェンダーと自由—理論、リベラリズム、クィア』、2013、吉野由利、173-193
- ④ 中井亜佐子・吉野由利編、彩流社、『ジェンダー表象の政治学—ネーション、植民地、階級』、2011、139-165

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

吉野 由利 (YOSHINO YURI)  
一橋大学・大学院法学研究科・准教授  
研究者番号：70377050